

2010年6月7日

大学教育学会第32回大会 大学の存在意義（レゾンデートル）

教育開発支援機構 FD 推進センター

センター長 川上 忠重

大学教育学会主催、愛媛大学共催による大学教育学会第32回大会が2010年6月5日（土）、6日（日）両日に愛媛大学において開催された。今回の総合テーマは「大学の存在意義（レゾンデートル）」である。本大会は、初日は部会に分かれた自由研究発表（78件）及び基調講演、二日目は、シンポジウム及びテーマ別ラウンドテーブル（14題）で構成されており、全国の教員・職員及び高等教育関係者が集い、高等教育についての議論と交流のできる大会である。今回は、自由研究テーマも多岐にわたり、部会発表テーマの一部を紹介すると、「学生とキャリア」「学士課程教育」「高大連携・接続」「教育方法」「日本語教育・初年次教育」「授業改善」等、各大学に共通するテーマはもちろんのこと、近年特に各関連機関でも議論がされつつある、「職員論・大学運営」「測定・評価」「FD 学生支援」「大学教授職」等の高等教育のさらなる進展のために必要なテーマもあり、大学教育におけるFD・SD（職能開発）と学生とともにすすめるFDへの関心の高さをあらためて感じた。

自由研究は、「授業改善」と「FD・学生支援」に参加の機会を得たので、その一部を紹介したい。「授業改善」では、eラーニング、学生の主体的学びを推進する授業改善、遠隔授業システムを用いた授業デザインと受講者の評価等の研究発表がされたが、「大学生の受講マナーに関する意識・実態調査」

では、講義時の学生の行動（本来は、講義の理解に必要な行動、たとえば「ノートをとる」「教科書を見る」等だけであるはず）の選択肢は、良くも悪くもバラエティーに富んだものになって事例紹介から始まり、授業中の注意も「私語をするな」の指示で済んでいたものが、「携帯電話をいじるな」「飲み食いするな」等の注意までしなければならなくなっている現状を踏まえ、学生自身がどうゆう態度で講義に臨んでいるかを調査し、「講義時」には「気づかれなければOK」「注意されなければOK」と学生自身が考えている可能性についても研究報告がされ、現在の学生の「講義」に対する考え方を一考する良い機会となった。

「FD・学生支援」では、学生によるFD活動の意義と可能性、プレFDの取り組み（TA教育）、学生研修用ゲーミングツール、教職員の職能開発に関する実証的研究が紹介され、教育開発支援機構 FD 推進センターのFDの定義（HP参照：一部抜粋）含まれている教育および学びの質の向上を目的とした教員・職員・学生による組織的・継続的な取り組みをさらに推進するアイデアの源泉となりうる研究報告であった。

今回の大会への参加により、「教育の質」保証を踏まえた「大学の存在意義」向上のため、各教学単位連携及び学生参加によるFD・SDの推進を検討し、また効果測定の指針の情報としたい。以上